

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第27号 - 通巻第39号)

発行：2022年12月21日

山口重克追悼特集号1

パート1 諸問題シリーズに寄せて(1)

青才 高志

(信州大学名誉教授 aosai@shinshu-u.ac.jp)

価値に関連した諸問題

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-27-1

http://www.unotheory.org/news_II_26

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上1-26-1 武蔵大学 横川信治

E-mail: contact@unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>

価値に関連した諸問題

青才高志

(信州大学名誉教授 (経済学部))

aosai@shinshu-u.ac.jp

- 第1節 山口重克の研究の歩み (初期)
- 第2節 価値の概念規定
- 第3節 原理論の展開方法
- 第4節 価値の量的規定—個別的価値と社会的価値—
- 第5節 生産論における労働と価値—価値と生産価格—
- 第6節 <価値形成>労働の要件論—生産価格構成要素—

[要旨]

本稿は、価値に関連した諸問題、および、それと関連する原理論の展開方法につき、山口重克の理論を検討したものである。まず第1節では、1961—1964年発表の3論文を取り上げ、以後の発展にも触れつつ、山口の初期研究史を跡付けた。以後、第2・4・5・6節では、『経済原論講義』での展開を導きの糸として、価値概念(交換性)の検討、個別的価値と社会的価値概念の検討、生産論における価値と労働との関係の検討・批判、資本の「絞めあげ」による人間の生活・生産の「変造」説の意義の顕揚、熟練労働、運輸労働・保管労働は「価値形成」的ではないという説の検討・批判、等を行った。第3節では、「行動論アプローチ」、個別経済主体の意識・行動の「模写」説、当事者・分析者論 (für es für uns 論)、「商品経済の論理」の展開による純粋資本主義措定論、1992年に提起されたブラック・ボックス論等、山口の原理論の展開方法を検討した。

本稿では、価値に関連した諸問題、および、それと関連する原理論の展開方法につき、山口理論を検討する。[紙幅の関係で、引用が部分引用になり、説明が短くなった点は寛恕されたい。]¹⁾

・1) 引用文中の[……]内および強調符はすべて筆者が付したものである。

第1節 山口重克の研究の歩み（初期）

山口は、[1996]『価値論・方法論の諸問題』の「はしがき」で、自己の研究史を振り返り次のように言っている（(a)等は、筆者（青才）の挿入。「私は経済理論の勉強を価値論から始めた。そして、大学院の入試論文も価値法則について書いた。しかし、」「これ（「価値論の問題」）に挑戦するのは少し後廻しにして、とりあえず(b)利子論・信用論とそれに関連する(c)貨幣論の方から理論の研究に入っていくことにした。(a)価値実体をどう規定するかという問題はむしろ実体を措定する機構的条件の方から攻めて行った方が理解しやすくなるのではないかという感じをなんとなく持ったからである。」「(a) これは宇野学派にとりわけ、実体と形態、生産と流通という二分法における後者を前者を措定する機構的条件として重視するという方法論があったということにもよるものであろう。」「大学院時代にはこうして私は、(c)『資本論』における貨幣の象徴化の説き方の問題と(b)信用貨幣の創造の問題を中心に研究を進めたのであるが、信用論をやっていると信用機構と共通の機構的意義を持っている(d)商業資本がどうしても問題になってくる。とくに宇野理論では、物神性論の説き方との関連で両者の位置関係が問題になっていたため、私の研究関心は、大学に職を得た頃から信用論から(d)商業資本論に進むことになった。」「当時の商業資本研究の一般的な論点の一つに商業労働は価値を形成するかという問題があり、その問題にも論及せざるを得なかったことから、結果的に、(a) 機構論を迂回して当初敬遠していた価値論を考究することになったのであった。」と（i—iii頁）。

以下、(a)等に関しコメントを付す。

論点(b)（信用論）。山口の大学院時代、東大経済大学院の鈴木鴻一郎演習参加者は、同時に、当時東大社研（社会科学研究所）に在職していた宇野弘蔵に直接学ぶ機会を持った。そして、彼ら（いわば宇野派第二世代の諸論者）は、鈴木編[1959]『貨幣論研究』、鈴木編[1960]『利潤論研究』、鈴木編[1961]『信用論研究』の各章を執筆し、そして、鈴木編[1960・1962]『経済学原理論』（宇野弘蔵監修『経済学体系』2・3）（以下、『鈴木原理論』と略記する）の原稿を執筆している。山口は、『信用論研究』に、山口重克の名を印象づけた論文、[1961]「商業信用と銀行信用——信用貨幣流通の意義と限界——」を書いている。本論文は、宇野の利子・信用論に対する問題提起を受け止めて『資本論』の綿密なテキスト・クリティークを行ったものであり、山口は病気の故に執筆はしていないが、『鈴木原理論』の信用論に大きな影響を与えたと思われる。そして、この山口信用論は、その後、小野・志村・玉野井・春田・山口共著[1971]『現代金融の理論』（第I篇第一章「信用の原理的機構」）において全面展開を見ることになった。^{2) 3)}

・2) 山口[1961][1971]は、後で述べる(c)の鑄貨論論文[1963]ともども、後に、山口[1984a]に再録されている。以下、引用は、再録本より行う。ただし、本稿においては初出時期も問題となるので、(山口[1961]……頁)等のかたちで初出時期も明示する。他の文

献に関しても同じ。

宇野のいわゆる預金先行説、それを批判した『鈴木原理論』のいわゆる発券先行説、そして、山口[1971]における、銀行手形→預金（当座預金→利子付き預金）→銀行券、の展開については、藤川昌弘[1976]「第Ⅷ章 信用」（大内秀明・桜井毅・山口重克編『資本論研究入門』）257-260頁を参照。なお、この大内等[1976]は、『資本論』の解説、研究・論争の紹介、そして、「1976年初期までに日本語で発表された、『資本論』に関する研究論文を収録」（附録1頁）した文献リストからなる。出版年の制約から言って1976年以後の論争・文献の紹介は当然ないが、研究者にとっても良き「入門」書である。

- ・3)山口信用論については、別稿の竹内晴夫稿を参照されたい。

論点(b)（貨幣論）。山口[1963]「鑄貨論の問題と貨幣論の方法」（後に「補章 鑄貨と貨幣の象徴化」という表題で山口[1984a]に再録）⁴⁾。山口[1963]は、『資本論』の克明なテキスト・クリティークを通じ、「全体として「鑄貨」論が「流通手段」から「貨幣としての貨幣」への展開の中でどうも何かデヴィエイトしたものになっている」（186頁）という点を明らかにしたものである。そして、この時点においてすでに、後の山口[1985]『経済原論講義』（以下、『山口原論』と略記）において展開される独自の山口貨幣論を彷彿とさせる以下の論点を提示している。①マルクスの蓄蔵貨幣規定には、「貯水池としての蓄蔵貨幣」（[1963]237頁）と「致富欲の対象としての蓄蔵貨幣」（244頁）とがあるとしている。そして、『山口原論』では、後者を山口貨幣章特有の第三節「致富機能」で説いている。②『山口原論』においては、鑄貨等は、第二章「貨幣」の「補論 貨幣制度」で説かれている。鑄貨等が「補論」で説かれているのは、もちろん、貨幣制度においては歴史的・地域的に異なる「法律や制度」、「原理論の世界」の外の世界が問題になるからであろう（『山口原論』48頁）。だが、それは同時に、上記の山口[1963]で述べられていたこと、「鑄貨」論が「流通手段」から「貨幣としての貨幣」への展開の中でどうも何かデヴィエイトしたものになっているが故、『山口原論』での用語で言うと、鑄貨等の諸規定は、第二章「貨幣」での貨幣の諸「機能」の「展開の中で」必然的な欠くべからざる媒介となっている訳ではなく、その「展開」から「デヴィエイト」（逸脱）しているものであるが故に、「補論」的性格を持つというのであろう。

- ・4)山口は[1984a]の「はしがき」v頁で「私事にわたって恐縮であるが、本書の第三章[山口[1961]]と補章[山口[1963]]のものの論文は、私の大学院時代の病中・病後の時期に私の叔父北野清の家の一室で、越前の海と海岸を眺めながら書いた物である。」と述べている。

だが、山口[1963]は、単に貨幣論における諸規定という点において『山口原論』の萌芽となっているだけではない。後で問題とする「行動論アプローチ」等の提示と言う意味においてもそうである。①山口は、（204頁）等、個々の個別経済主体の側からの、「個々の購買や販売」における規定・機能を問題としている。また、後に問題とする「模写」という言い回し（山口[1984c]）「いわゆる「方法の模写」について」論文を彷彿とさせる言い

回し) からして、山口[1984 a]に再録した際に加筆されたものなのかも知れないが、山口[1963]252 頁で「流通形態論は、商品論も貨幣論も資本形式論も、個々の流通主体の個別的な商品経済的な行動を模写するものとして展開されなければならないと考えられる。」と言っている。②(243 頁・254 頁)等、後の言い回しで言えば、商品経済の不確定性が軽視されているとマルクスを批判している。③生産論で問題となる「社会的生産」は、第三篇で「解明され」る「現実的な機構」によって「措定」される、第三篇では「その反作用を受け止める現実的運動の総体が解明され」る(256-257 頁)等、『山口原論』170 頁と同様な規定を与えている。

論点(d) (商業資本論)。山口[1964]「商業資本と商業利潤」(1)(2) ([1983a]『競争と商業資本』に再録) 5)

- ・ 5)山口商業資本論については、別稿菅原陽心稿を参照されたい。

『旧原論』等宇野は、流通費用は剰余価値からの控除であり、商業資本において資本化されるのであって、利潤論においては未だ資本ではない、そして、流通費用・流通資本はその不確定性(個別性、偶然性)の故に利潤論では除外されなければならない、と言っていた。それに対し、山口は、本[1964]論文では、宇野を批判し、「偶然的な、個別的な相違」の故に「資本たりがたいにもかかわらず、資本たらざるをえないものとして、流通費用、流通資本を「除外」しないで考察することこそが、むしろその(産業資本の——青才)「原理」を明らかにすることを可能にするものであると言わなければならない。」(136-137 頁)と主張していた。山口[1961]の信用論、山口[1963]の貨幣論においても、実質はマルクス批判に留まらず宇野批判という面はあったのだが、ここ山口[1964]では、綿密な宇野のテキスト・クリティークを通じた宇野批判を行っている。山口[1983a]『競争と商業資本』へと体系化される山口商業資本論の橋頭堡は、この山口[1964]において築かれたとっていいだろう。6)

- ・ 6)宇野の利潤論における流通過程除外(捨象)説、山口の、流通過程(流通費用・流通資本)は利潤率規定には当然入るが、その「不確定性」の故に生産価格の規定においては捨象されなければならないという流通過程捨象説、そして、それに対する批判については、青才[1990]「第三章 流通過程の不確定性と生産価格論」を参照。なお、この山口の流通過程捨象説については、「価値」形成論との関連で後でも(第6節でも)問題とする。

論点(a)等(「機構」を介しての「価値」の規定)。(a)の「機構論を迂回して……価値論を考究」の意味は、直接には、その文の次の2パラグラフ([1996]v 頁)で山口が述べていること、すなわち、「費用—効果の間の関係が確定的」であるかどうか、「価値形成的か否かを区分する基準」となるという山口の「価値形成」論のことである。だが、(a)の「形態」「流通」を「重視」という論点、(c)山口[1963]で提示されている、後の言い回しを用いていうと「行動論アプローチ」等も、上記の2パラグラフの次のパラグラフの「価値そのもの(の)概念規定」は「交換性という概念ではないか」(vi 頁)等、山口価値論を大きく規定していたと考えられる。以下、価値=交換性、個別的価値こそが価値である等々

の山口価値論を、特に、行動論アプローチ等の山口の原理論展開の方法論との関連に配視しつつ問題としよう。

〔経済原論の体系的展開のなかで与えられる諸規定こそが勝義の規定であるので、以下、『山口原論』の展開に沿って、価値に関連する諸問題を考察しよう。〕

- ・7) 「個別論文」的叙述と「原論体系」的叙述とが理論展開の内容にどう関係するかという点に関しては、宇野[1973]『資本論五十年』下、909頁を参照。

第2節 価値の概念規定

まず、山口の、価値の概念規定、価値の定義を問題としよう。山口は、『山口原論』冒頭第一章「商品」の冒頭パラグラフで、次のように述べている。「われわれは商品流通世界を構成する経済主体のうち最も基礎的、抽象的な経済主体を出発点に据え、彼の意識と行動の観察から原理の展開を開始する。それは交換を要求する商品の所有者という経済主体である。」と(14頁)。次15頁に「行動論的展開を通じて」という表現も見られるが、まさに「行動論(的)アプローチ」の表明である。なお、冒頭の「われわれ」という用語にも注意されたい。『資本論』冒頭第一章「商品」の冒頭パラグラフの「われわれの研究は商品の分析から始まる。」の「われわれ」と同じく、著者としてのわれわれ、後に問題とする、当事者・分析者論における分析者としてのわれわれである。

山口の文章の特徴は、厳密な用語法、緻密な論理展開、注意深い筆致にある。そして、『山口原論』特に最初の箇所はとりわけそうである。第一章「商品」の第2パラグラフで、山口は、「剰余と交換に他の有用物を入手して不充足欲望を満たそうとする場合の彼のこの剰余としての所有物が商品であり、そのような要求を持つことによって彼は商品所有者となる。ある経済主体が他の経済主体との間で交換という関係を取り結ぼうとすることによって、所有物が商品という規定性を受けとるわけであり、商品とその所有者は一体不可分のものである。以下で、商品形態を考察する場合、その背後には、必ず行動主体としての商品所有者が存在することが留意されなければならない。」(14頁)と述べている。商品は自存的な物ではなく、社会的存在であり、商品所有者の「行動」が、「経済主体」と「経済主体」との特定の「関係」が、特定の物を「商品」たらしめているという点、すなわち、経済学的諸規定は、経済主体の意識・行動に即して与えられるという点(いわゆる「行動論アプローチ」による規定)に注意されたい。すぐ後で問題にするように、商品の「価値」とはなにかという、商品の概念規定も、商品所有者の商品との関わりに即して与えられるしかないのである。

『山口原論』第一章第一節「商品の二要因」の冒頭で山口は、価値の概念規定を与えている。「商品はその所有者にとって他の何らかの有用な商品と交換されるべき物である。…他と交換されうるということがその商品の所有者にとっての有用性なのである。そこで、商品はまず何よりも他者の物との交換性を持つものであると定義することができる。商品のこの交換性を商品の価値という。」と(15頁)。私なりに、強調符を付した文を読み込むならば、山口は、商品の価値を、当該商品の、当該商品所有者にとっての「有用性」

(価値)から、「交換性」と規定しているのである⁸⁾。次節では、これまでの展開で問題となった「行動論アプローチ」等、山口の原理論展開の方法を問題としよう。

- ・8)この「私なり」の「読み込(み)」については、青才[1984] 87—88 頁参照。そこでは、「リンネル商品所有者」「にとって(の)……商品リンネルの価値」「特殊経済的な価値ではなく一般的な「意味・意義」というレベルでの価値」は「他の商品に対する交換可能性・支配力である」と述べた。

第3節 原理論の展開方法

山口は、[1984b]「経済的諸関係と行動主体」(山口[1987b]に再録)で、「行動論アプローチ」、分析者・当事者論等、原理論の展開方法について述べている。この山口[1984b]論文は、その「行動論アプローチ」という術語を含め、多くの論者から参照の対象になった。そしてまた、ここでは、本稿の主題である「価値に関連する諸問題」にも関わる論点が提示されている。

[1]山口は、[1984b]論文の冒頭(3頁)で、川合一郎は、「経済理論の展開方法」には、「論理的演繹アプローチ」あるいは「行く先論アプローチ」と「行動論的・発生論的アプローチ」あるいは簡略化して「行動論アプローチ」との二つのアプローチがあるとしている、と言う。そして、その後の3パラグラフ(3-4頁)で、川合は、この二つのアプローチは相補的であるにも拘わらず、宇野は後者の「行動論アプローチ」を重視し過ぎであると「マイナス」に評価している、だが、「私はプラスに評価したい」といい、さらには「むしろ宇野は必ずしもこの行動論アプローチに徹していないところに問題を残していると私は考えている」と言っている。

山口も4頁(およびそれに対する注5)で指摘していることだが、原理論展開への行動論アプローチの導入は、宇野弘蔵・向坂逸郎編[1948]『資本論研究——商品及交換過程——』(対談の記録)における、宇野の、価値形態論の展開は商品所有者の契機を欠いては考えられないという周囲の人々を驚かした画期的な問題提起で開始されたものだった。そして、どこまで宇野によって実現されたかは議論があるところだが、「主体的契機を積極的に導入する方法」によって、「個別的流通主体の行動はバラツキがあるものとして[、また、変動するものとして]設定」され、「経済的諸関係と流通諸形態も不確定的なもの、不均質性を内包したもの[、また、動的なものとして]展開されうることになったのである(13-14頁)。山口原理論のキータームをなす、流通の不確定性という規定の登場に注意。そして、また、この行動論アプローチの積極的導入が、山口の「原理論の競争論的・機構論的再編成」(青才[1990]vi頁)を結果していったのである。

[2]山口は本論文8頁で「分析者は当事者の行動をいわば模写するにすぎない」と言っている。また、以前述べたように山口[1963]252頁で「模写」という言い回しをしている。ところで、この「模写」という言い回しに関連し、山口は、[1984c]「いわゆる「方法の模写」について」([1987]に再録)という論文を残している。そこで、山口は、宇野の「方法の模写」、「経済学の原理論は方法そのものを対象から模写している」という場合に「二通りの意

味」(39頁)があるとし、一つは、現実の資本主義の「純粋化傾向を延長することによって得られた」純粋資本主義が原理論の「対象」だというものであり(39-42頁)、もう一つは、「二 対象としての人間の意識と行動」節で述べていること、すなわち、「方法の模写とは純粋資本主義を構成する経済主体の商品経済的な行動が社会的生産の均衡編成を実現するその様式を模写することである(と[宇野の叙述を]読むことができるのである)」(46頁)とするものである。「経済学の対象は主体的、意識的に行動している人間である」(47頁)としている点、原理論の展開は、その「行動」の模写であるとしている点に注意されたい。[この「対象」の問題、原理論の対象は純粋資本主義であるという規定と、原理論の対象は「純粋」に「商品経済的」・「な行動」(または、に「行動」する「人間」)であるという規定との違いに注意されたい。その点については、後に、本節[5]でも問題とする。]

[3]山口がそうしているように、「行き先論」と「行動論」という二つのアプローチを、「分析者ないし観察者の立場と当事者の立場」([1984b]7頁)という概念枠組との関連でも問題としよう。これは、「物神性論者の議論——具体的には廣松渉や高橋洋児ら……——によく見受けられる」(同7頁)のものである。また、山口は、論争論文[1995]「廣松渉の価値・貨幣論を読む」(後に山口[1996]に所収)でこの概念枠組に触れ、廣松は、「学知の体系的叙述[例えば経済学原理論(青才)]の方法論としてフェア・エス[für es](当事主体の意識にとって)の次元とフェア・ウンス[für uns](学知的観察者にとって)という次元とを自覚的に区別」することが必要である、と述べているとしている(99頁)。また、次100頁では、「廣松は、当事者と観察者の関係を読者と著者と類比的に説明し、両者の対話という論点を持ち出している」と述べている。

上記のヘーゲル・廣松的な für es für uns 論に関しては、廣松渉[1989]『弁証法の論理—弁証法における体系構成法—』を参照。以下、わたくし的に捉えた für es für uns 論を山口の原理論展開に読み込んでみよう。経済学原理論の展開における、例えば、価値は「交換性」であるという価値の概念規定は、人間、より正確には人間関係がその対象である社会科学においては実験による証明は不可能であり、「弁」で「証」明するという方「法」(弁証法 dialectic)によって与えられるしかない。著者は、読者を説得し、読者に納得(理解)して貰うしかない。弁証法とは、ソクラテスにおけるそれ以来、対話法 dialectic、すなわち、著者と読者との対話 dialogue を通じた、説得(講義、説教) lecture のことをいうのである。『山口原論』の読者も、その出発点における認識のレベルは、für es, 当事者(『山口原論』14頁の「交換を要求する商品の所有者」)のそれと想定するしかなく、商品の価値の概念規定も、当該当事者の「意識と行動の観察から」(同14頁)与えられるしかない。「行動論アプローチ」により、当事者の行動を「模写」「追跡」(山口[1984b]7・8頁)すると、当事者である商品所有者は、商品の価値とは、私に「とっての」商品の価値(=「有用性」『山口原論』13頁、意味、役立ち、意義)とは、その商品の「交換性」のことであると語り出す。そして、商品経済のなかに生き、商品所有者の気持ちが解る読者、商品所有者の「意識と行動」の意味が解る(「理解」([1984b]12頁)[ウェーバー理解社会学の「理解」]できる)読者は、この「交換性」という価値の概念規定に納得するのである。

それ以後の商品論の展開、価値形態論の展開(『山口原論』18-19頁)においても、同様である。リンネルの価値は他の商品(例えば茶)の使用価値で表現されると言っただけでは、何の

ために価値表現するのかということも含め、何のことか解らない。だが、茶を欲しがっているリンネル商品所有者を舞台に登場させれば、そして、リンネル商品所有者の気持ちになれば、事態は明瞭になり、読者の納得できるものになる。リンネル所有者は、欲望の対象である（彼にとって「使用価値」である）「5ポンドの茶」と「交換」してくれるならば、「自分の商品10ヤール」を提供しましょうと提案（プロポーズ）しているのである。リンネル所有者は、茶との交換要求を通じてリンネルの価値を表現しているのである。リンネルの価値（交換性、量まで考えると交換力）を茶の使用価値で表現するとは、そういうことなのである。

この価値表現が、リンネル所有者による提案（リンネル所有者の側からの「一方的関係」）だとすると、その交換が「実現」するかどうか（その価値（交換力）が現実化するかどうか）はわからない、また、たとえリンネルを求める茶商品所有者に「出会うことができても」（10ヤール・5ポンドという）交換比率について合意に達しうるかどうかは、不確定である。商品の「価値実現」は「不確定」なのである。ここ「簡単な[単純な（青才）]価値形態」において、『山口原論』全体において重要なカテゴリーをなす、「市場経済の不確定性」（流通の不確定性）概念が「提示」されることになるのである。

そして、リンネルの価値表現が、リンネルの側からの「一方的」交換要求であるとする、その交換が実現するかどうかの「イニシアティヴ」は等価形態にある茶の側にあることになる。また、茶所有者がリンネル所有者の提案に対しイエスと承諾しさえすれば、茶はリンネルと「そのまま」（なんらの媒介 Mittel なしに、「直接」に *unmittelbar*）「交換可能」である。「貨幣による価値表現」すなわち「価格」において、貨幣は「一般的直接交換可能性」を持つ（『山口原論』「貨幣形態」節 28-29 頁）、「売買のイニシアティヴを握っているのは貨幣所有者の買手である」。マルクスいうところの商品の命懸けの飛躍（「販売」の困難）は、「購買手段としての貨幣」の出動（「購買」）によってのみ超えられるのである（同「貨幣」章 32 頁）。なお、商品の「価値」（交換力）がどれだけであるかは、この「購買」によって「実現」された価値（量）として「確定され」、「客観的に測定」されるしかないのであり、「この貨幣による購買機能」が「商品の価値を現実的に尺度する機能」（同「価値尺度」項 37 頁）なのである。総じて、商品論・貨幣論の諸規定は、当該経済当事者の「意識」「行動」として規定されるしかないのである。そしてまた、その当該経済当事者の気持ちがわかる読者、彼の行動の動機・意図を理解できる読者（聴衆、受講者）は、商品の価値実現の困難に起因する貨幣発生 of 必然性を、さらに、貨幣の諸機能の意味を知ること（学ぶこと）になるのである。

[4] für es für uns 論を終え、山口[1984b] (8-9 頁) の当事者・分析者論に帰ろう。(a)山口は、「原理論展開の対象ないし目標とその方法を選択し、決定しているのは分析者である」という。また、「分析者は演出者としてシナリオどおりに舞台が進行するように登場人物[当事者]を誘導する」という。(b)そして、「しかし、原理論という舞台では、分析者はそれ以上のことはしてはならない」とし、「分析者が予定していた行く先は、当事者との関係で変更されることがありうる」、「行動論的に説けそうもないところに立ち至った場合には、[川合が言うように]飛躍するのではなく、原理論の対象から……はず」すべきだ等と言う。[1984b]論文全体の主旨は、もちろん、(b)の側面、「行き先論」の問題点（6 頁）の指摘にある。だが、山口が、ここで(a)の側面を言っている点には注意する必要がある。そして、『山口原論』第二篇「生産論」（はしがき）79 頁では「第一篇[流通論]は商品世界内部の個別経済主体の商品経済的な意識と行動が形成する関係をいわば写すといった展開であったのにたいして、第二篇は他の生産体制との比較

なり将来の生産体制の展望を念頭におきながら資本主義的生産体制の特殊な本質を第三者的に、あるいは分析者の関心にしたがって、分析するものである……。また、その意味で本篇は、資本主義的生産体制の歴史的な意義と限界を確定するという、分析者の資本主義批判を叙述するところでもある」と言っている。また、第三篇「競争論」(はしがき) 170 頁では、「分析者の関心如何によっては」、「という点に分析者の関心がある」、「この点に分析者の視座が定められ」等、「分析者の関心」がどこにあるかが明言されている。山口は、『山口原論』において、隠れて「演出」「誘導」するのではなく、自己(著者、分析者)の「関心」を明言しているのである。良心的な著述スタンスと言うべきだろう。[なお、菅原は[2012]『経済原論』[以下『菅原原論』と略記] 8-9 頁において「当事者」・「分析者」について述べている。]

[5]なお、山口は、上記(b)で「行動論的に説け」ないことは「原理論の対象から……はず」す(9 頁)べきだ、といている。以下、この点を、問題としよう。

山口は、鎌倉孝夫との論争論文[1979]「原理論の課題と方法」([1983 c]に再録)で、上記と同様なことを言っている。「商品経済の論理だけで展開できるところまでが原理的規定となり、出来ない部分については……原理論の世界から除去される(237 頁)と。そして、「あらかじめ表象される純粋資本主義」と「原理論の展開の結果として措定される純粋資本主義」(同 237 頁)という二つの純粋資本主義⁹⁾について述べ、「資本結合」「資本市場」(248 頁)は、「商品経済の論理だけで展開できる」ので、「原理論」のなかに(後者の「措定(された)純粋資本主義」のなかに)入ると言っている。[「商品経済の論理だけで展開できる」ものは原理論の内、といっても、何処まで説けるか、何は説けないかにつき、客観的に仕分けができるとは言えないと思う。山口(『山口原論』「資本市場と証券業資本」節)は、「資本結合」といっても、出来るだけ高い利潤率を求めて資本投下(出資)する資本(α 型の資本—渡辺裕一[1984]の表現)と資金の運用先として資本投下(出資)する資本(β 型の資本)との結合(α - β 型の資本結合)のみが、原理論の内、 α - α 型の資本結合は外と言っている。筆者は、出来るだけ高い利潤率を求めて資本結合する α - α 型の資本結合も「商品経済の論理だけで展開できる」のであり、当然原理論の内において説くべきと考えている。(青才[1992]「株式資本論について」(山口重克編『市場システムの理論』(山口還暦記念論文集))参照。また、渡辺裕一[1984]「資本結合と証券業資本」を参照)]

- ・ 9)この二つの純粋資本主義については、[1984c] (「模写」論文) 42 頁でも触れているが、その際には、「(両者の) 区別」に関し、[1968]「信用恐慌論の方法」(後に山口[1983 c]に再録) 162-3 頁の参照を求めている。

筆者は、山口[1979] (二つの純粋資本主義)・[1984 c] ([2]項で述べた、対象は純粋資本主義と対象は人間の行動)等から学び、マルクスの『経済学批判要綱』当時の<資本一般>の立場と『資本論』当時の<資本の一般的分析>の立場とを、宇野の二つの「純粋資本主義論」に対応させ次のように述べたことがある(傍点の強調符は今回の加筆)。「宇野氏の「純粋資本主義論」には、「純粋資本主義」の「論」であるという側面と、「純粋」な「資本主義論」であるという側面とがある。前者は、非資本主義的と思われるものを捨象・排除することによって「純粋資本主義」なるものを想定し、それを分析することによって資本主義一般論としての原理論を構築する、という捨象の方法・対象設定の方法としての「純粋資本主義論」である。それに

対し、後者は、資本主義を純粋に商品経済の論理に従って説こうとするもので、そこにおいては、経済当事者の意識・行動に内在した抽象、経済学の対象である経済当事者に語らせるという形での展開、ウェーバーの理解社会学の方法の利点を生かした分析が問題となる。それは、抽象の方法・論理展開の方法としての「純粋資本主義論」であり、前者の場合とは異なり、「純粋資本主義」なるものは、論理展開の最初ではなく「原理論」展開の結果として最後に登場することになる。」(82頁)と。

[6]上記[5]で述べたように、山口[1979]では、「商品経済の論理だけで展開」される「原理論の展開」によって、「純粋資本主義」が「措定される」(237頁)と言っていた。以下、この点に関連し、筆者の見るところ別様の規定とも思える山口ブラック・ボックス論を問題としよう。

山口[1992]「段階論の理論的必然性—原理論におけるいくつかのブラック・ボックス—」(山口重克編『市場システムの理論』(山口還暦記念論文集))において、山口は、ブラック・ボックス論を提起している。筆者は長く、ブラック・ボックスという用語は、山口の公表論文では、本[1992]が初めての登場と思っていた。だが、用語自体は、[1985]『山口原論』141頁で、「生産過程における資本家と労働者の間の対立と調整の具体的過程そのものは」「ブラック・ボックスにしておくしかない。」という形で登場していた。また、山口は[1979]以来、「商品経済の論理だけで展開」できないものは原理論の外とっており、原理論の外=原理論では説かれぬブラック・ボックス、という訳なので、ブラック・ボックスという用語それ自体が新概念という訳ではない。問題は、[1992]で説かれたその位置づけにある。山口は、「社会的生産を市場経済的な原理だけで自立的に編成することの無理」を指摘し、原理論では「純粋資本主義をあたかも自立するかのごとくに説くために、いくつかの問題をいわばブラック・ボックスに入れている」(5頁)という。そして、山口は、ブラック・ボックスの「埋め方」は様々であり、様々な「類型」(「段階」を含む「類型」)(5頁)が、段階論および現状分析では問題となるが、「原理論では簡単な仮定をおくことによって処理される」(20頁)という。この点、特に「簡単な仮定をおく」ということにつき、「貨幣素材の固定」の問題を例にとって検討しよう。

『山口原論』では、「一般的等価物は変動可能であり、また複数種存在することも排除されない」と指摘しつつも、「以下では貨幣(「一般的等価物の地位に多少とも定着した商品のこと」)は金に固定化するものとして議論を進める」(26-27頁)という。ここでは、未だブラック・ボックスという言葉は用いていないが、「貨幣素材の固定、つまり本位貨幣の制定の問題」(山口[1992]8頁)は、ブラック・ボックスに入れるという訳である。そして、『山口原論』27頁では「便宜的に貨幣がある単一の商品[ここでは金]に固定されている」と仮定し以下原理論を展開するとしている。山口は、極めて早くから、最初の公表論文[1961]「商業信用と銀行信用」において、単一の中央銀行による発券の独占の問題に関し、「ナショナルな要請を別とすれば、複数の銀行がいわゆる銀行の銀行になってもさしつかえない」(85頁)としていた。貨幣の特定素材への固定化の問題といわゆる発券の独占の問題との同質性に注意された。だが、両者は異なる。『山口原論』231-233頁において、山口は、「信用機構の重層構造」、「銀行の銀行」「上位の銀行」の発生、「いわゆる預金銀行と……いわゆる発券銀行の分化」を問題とする。だが、その「銀行の銀行」は、複数あってもよく、変化してもよい、また、同じく、発券銀行は複数あっても、それ故、複数行の(兌換)銀行券が流通していてもよく、そし

て、発券銀行の交替があってもよい、としている。「銀行の銀行」の発生による「信用機構の重層構造」が説ければ、唯一の発券銀行である中央銀行を前提することなく、『山口原論』第三篇第三章「景気循環」等の展開は可能であるというのであろう、Nationの媒介による、唯一の発券銀行である中央銀行の成立を仮定することはない。しかしながら、貨幣の場合には異なっている。「純粋資本主義をあたかも自立するかのごとくに説くために」(山口[1992]5頁)、Nationの媒介による、貨幣の特定商品(金)への固定化の過程自体はブラック・ボックスに入れ説かないが、貨幣制度の問題は、それ以後の貨幣章、資本章等の展開を考えると、「ブラック・ボックス」の「埋め方」は様々である([1992]5頁)、貨幣制度の在り方は、段階論(類型論)の対象で、(1)複数の商品貨幣の並存、(2)特定商品が本位貨幣、(3)兌換制の停止・廃止等、様々であると言って済まず訳にはいかない。兌換停止後だと、銀行信用、景気循環の説き方は、『山口原論』での説き方とは当然違って来るからである。そして、『山口原論』27頁では、難しい問題があるのは承知の上で、「便宜的に」金本位制を前提して、それ以後の展開をおこなっている。ブラック・ボックスの「埋め方」は、貨幣制度は様々であるが、ここでは、その内、金本位制が選ばれているのである。「商品経済の論理だけで展開」(山口[1979]237頁)できないものはブラック・ボックスに入れられるといっても、そのブラック・ボックスに入れられたものの内の特定のもの(例えば金本位制)に支えられて「純粋資本主義(の)……自立」(山口[1992]5頁)が可能になるとすれば、原理論の展開は「市場経済的な原理」(6頁)とその作動を支える数多くの「簡単な仮定」(20頁)[単純な?仮定]によって可能だとされている訳である。検討が必要な論点と思える。

なお、小幡道昭の「開口部」論は、この山口の「ブラック・ボックス」論を受け止めたものである。そして、[2009]『経済原論』[以下『小幡原論』と略記]の商品章末の貨幣の規定において、ここは「開口部」であるとし、「物品貨幣」が支配的か、「不換銀行券」も含めた「信用貨幣」が支配的かは、「原理的に特定できない」といつている(47頁)。¹⁰⁾

・10)小幡[2006]、『小幡原論』で提起されている、価値形態論で「信用貨幣」を説く説に関しては、江原[2018a]、(泉等)さくら原論研究会編[2019]、江原[2021]、岩田[2022]等をも参照。なお、岩田[2022]55—64頁には、「先行研究」の簡便なサーベイがある。

第4節 価値の量的規定—個別的価値と社会的価値—

山口は、時と所でバラツク個別的価値こそが価値だと考えている(『山口原論』34頁)。以下、この点につき、山口[1976]『資本論研究入門』「第II章 貨幣・資本」(山口[1983c]に再録)119-123頁における「価値尺度をめぐる論争」のコメントを参考に考えてみよう。宇野が、単純な価値形態でリンネルの価値表現を問題にした時、また、購買によって商品の価値は「尺度」される、量られると言った時、その価値は、それ以上の説明がない限り、時と所でバラツク個別的価値である。山口の価値概念は、これを受けたものである。だが、宇野は、購買の「繰返し」による(生産を背後に含蓄した)基準のある価値の措定を説く。この宇野価値尺度論は、渡辺昭による批判[1962]「価値尺度としての貨幣」以来問題にされることになる。山口の価値は、山口がこの論争において渡辺の側に立ったことを意味する。

(表現価値と実現価値という)二つの個別的価値を規定した後、『山口原論』35-37頁で、

山口は、「売買」の「繰り返」しによる「いわゆる一物一価の関係、あるいは物価水準(の)形成」を予料してか、「同一商品の同一使用価値量は同一価値量を有するという観念の形成」を指摘し、その「第三者的な価値」・「社会的(な)価値」を第三の「価値」だとする。だが、この「社会的価値」概念は、山口本来の価値概念ではないのではなかろうか。「社会的価値」は、山口においても、始めから、「はずであるという観念」と位置づけられている。また、山口自身、降旗との論争論文[1991]「価値概念の広義化再論—降旗氏の反論に答える—」(山口[1996]に再録) 48 頁で、ある条件つきではあるが「これ[社会的価値の規定]は削除してもよいような問題なのかもしれないとは思っている。」と語っている。

なお、『山口原論』の継承発展を目指す『菅原原論』では、価値概念は、個別的価値に限定し、山口の社会的価値に対応する価値(の形態である価格)は「相場」(40 頁)と呼んでいる。『小幡原論』では、山口の個別的価値概念を批判し、「商品種」に対する「社会的評価」(30 頁)を問題としている(55—56 頁も参照)。[筆者のスタンス。商品論冒頭の商品の価値概念は、山口の概念規定とならざるをえないと思えるが、山口の個別的価値こそが価値という価値概念は、供給過大で「価値以下での販売」が強制される等の問題枠組みで事態を捉えることができなくなる概念規定であり、また、売れなければその商品は価値がなかったのだと(その商品生産で価値は形成されてはいなかったのだ)ということになってしまう概念規定であり、それでいいのか疑問なしとしない。]

第5節 生産論における労働と価値—価値と生産価格—

マルクス経済学は、価値¹¹⁾と生産価格との関連をめぐって旋回を続けてきた。[以下の叙述に関しては、青才[1990]viii—xi 頁, 63—74 頁参照]

- ・11)以下しばらくは、行論上、「価値」という場合、山口のいうところの価値ではなく、マルクスの価値、それを踏襲した宇野の生産論以後の価値を意味する。マルクスは、労働によって、労働量と比例的な価値が形成されるとしている。

宇野は、「価値と生産価格との関係を単純商品生産と資本制生産との歴史的序列に対応した論理的序列だとする見解を批判し、利潤率均等化の法則を価値法則の実現形態・貫徹機構と捉え」(ix 頁)、また、商品論で価値=労働という形で価値実体論を説いたマルクスを批判し、労働価値説の論証は、基本的にはいかなるものも生産しうる労働力商品による商品の生産という形で、生産論でなすべきだとした。だが、その論証は、生産論の世界では価値どおりでの交換がなされるとするものであり、そして、第三篇「分配論」の利潤論冒頭では、マルクスと同様に「価値どおりの交換」を想定するものであった。その結果、価値通りの交換→資本間で構成・回転が異なると利潤率は相違→資本移動による利潤率の均等化→生産価格の成立、という、資本移動(労働配分の変更)による価値の生産価格への転化論(高須賀義博の命名によれば「競争転化論」)を主張することになっていた。「この点を批判し、[生産価格論史における新たな]幕開きを告げたのは、櫻井毅氏の

論稿 ([1958]「価値の生産価格への転化について—ボルトキエヴィッツといわゆる「転化問題」」[櫻井[1968]に再録])であった」(青才[1990]66頁)。そこで提示された論点(66—67頁参照)は、一部の例外を除き、『鈴木原理論』等、山口を含めた宇野派の諸論者に引き継がれることになった。

櫻井は、「歴史的な問題としてはもちろんのことであるが、論理的な問題としても、商品の価値での売買を一般に想定する必要はないのではないか。」という([1958]266頁)。この主張の本質的正しさを踏まえると、生産論において価値(量)をどう規定するか、商品の売買関係をどう想定するのかということが問われることになる。『山口原論』「価値の重心」節(106—129頁)で、山口は、「価値の重心」を問題とする。論点(1)「用語上の注意」項で、「価値の変動の重心としての価値のことを、一般には単に商品の価値と呼んでいることが多いのであるが、これはあくまでも簡略化した用語法[「生産論的省略法」109頁]である」(108頁)という。[「一般には」、マルクスの、労働量比例的な価値を「価値と呼んでいる」(以下、行論上必要な時は、このマルクスの価値を<価値>と呼ぶ)。ここで山口は、「価値の重心」を「生産論的」「簡略」「法」での価値としているが、その「価値の重心」は、価格変動の「重心」である生産価格の形態を取っている交換力(価値)の重心であるはずである(124頁参照)。]。論点(2)山口は、123頁—127頁でそれまでの展開を踏まえ「価値の重心と労働編成」につき述べている。①必要労働のみがなされている場合には「生産要素の補填原則」から「価値と投下労働量の関係」は比例的になる、②だが、剰余労働がなされている場合には、「第三篇で詳論される」「一般的利潤率の形成という別の規制力が作動」し、「価格はいわゆる生産価格を重心とする法則的な変動を行う」と。論点(3)山口は、「第三節 資本価値の増殖」の冒頭の「方法上の前提」(129—131頁)で、「安定的な利潤の根拠をめぐる資本と賃労働の関係という論点に問題をしばり、「資本・賃労働の構成比率が」(資本間で)「一様」(131頁)な場合、「資本構成に相違のない代表単数としての資本の連関」(132頁)の場合には(以下想定Xと呼ぶ)、「必要生産物連関についてのみ妥当する関係[労働量と価値量との比例的関係]を剰余生産物連関を導入した場合にもそのまま適用するということと同じ結果になる」という。[山口は比較的早く、[1972]の論文「労働生産過程と価値の実体規定」(山口[1987b]に再録)の「五 宇野『原論』における価値実体の論証」134—146頁において、宇野『原論』の綿密なテキスト・クリティークを行い、宇野においては、「価値形成[労働による価値の規定]の問題が必要労働によるその問題に限定されていた」(144頁)点(上記(2)の①)を析出し、宇野は明確に言っていないが、「資本家と労働者との関係を一般的に扱う」[『旧原論』84頁]……「生産論」では、剰余生産物の資本間流通の具体的考察には立ち入らないで、「価値形成過程」論[必要労働のみがなされているレベルでの論]で明らかにされた価値規定がそのまま維持されるものとして説くのだということが説明されるべき」(146頁)だった(上記(3))としている。

論点(3)の後、『山口原論』「不変資本と可変資本」項(131—134頁)では、価値の移転、価値の形成、不変資本と可変資本、剰余価値等、マルクスが『資本論』第1巻で与えた諸規定について述べている。問題とされるべきは、山口理論において労働による価値の「形成」という概念連関が成立しうるのか、という点にある。マルクス・宇野的な<価値>概念を踏まえると当然の疑問であるが、新田滋は、「[山口の]価値形成労働といういい方(は)

「妥協的言い回し」であるという」(山口[1990]「流通費用といわゆる価値形成について—新田滋氏の批評[新田[1989]]に答える—」(山口[1996]に再録)(76頁,以下77頁も参照)。それに対し,山口は,「従来の論争との連続性を考慮して,旧来の用語法をそのまま踏襲しているから」「妥協的である」が,労働による「価値形成」とは「(価値の)重心形成といいかえることができ」,「労働が(「価格変動の」)重心を規定するということを意味」しているので,新田がいう「適切な度合いを越えた妥協」ではない,という。概念・規定は,原理論の体系的展開の内において与えられるしかないが故に,山口理論において労働による価値の「形成」という命題が成立するかどうかを,以下,『山口原論』の論述に沿って問題としよう。

山口「生産論」の「価値の重心」節では,「価値の重心」が問題となる。以下,しばらくは,「価値」概念が問題となっているので,「価値(の変動)の重心」を「生産論的に」簡略化し「単に価値と呼ぶ」ことなく,「価値の重心」という(論点(1)参照)。(以下,論点(2)(3)参照)。「必要生産物連関」では「価値[=価値の重心]と投下労働量の関係」(124頁)は比例的である。「諸商品の価格変動の重心を規定しているのは社会的生産の基準編成である」(119頁。123頁にも同様の叙述あり)。だが,「剰余生産物連関」になると,価格変動の重心は生産価格であり,(生産価格という形態を取る)「価値の重心」と労働とは比例関係にはない。しかし,想定Xのように,「資本構成に[,回転も,固定資本の比率等も一青才追加]相違のない」(132頁)資本間の場合には,剰余労働がなされている場合にも「価値の変動の重心」(=想定Xの場合に成立する価格変動の重心としての生産価格,という形態にある価値(交換力)の重心)と労働とは比例関係にある。[マルクスのない方をすれば,資本構成等に相違がない場合には,「価値どおり」の交換がなされるということになるわけである]。そして,山口は,「労働が価値を規定するという命題も,……基準労働編成が価格変動を規制しているという意味のものと理解」(127頁)すべきと総括する。ここの「労働が価値を規定するという命題」は,「生産論的に」簡略化をしないならば,「労働が[価値の変動の重心]を規定するという命題」になる。労働による「規定」「規制」という概念は登場したが,まだ,価値の「形成」という規定はない。以下,『山口原論』「第三節 資本価値の増殖」を問題としよう。

第三節冒頭の「方法上の前提」項(論点(3))の後,「不変資本と可変資本」項では,「…生産要素の価値が新たな商品にそのまま移転され,新たな商品の価値を構成することになるとみなすことができなくはない」(133頁),「労働力はその消費過程において……,新たな価値を形成[正確には「生産」¹²⁾する」(134頁)という。価値の移転,価値の形成という概念は,ここで初めて登場する。この項以前の論述では,価値概念は,「時と所でバラツク」山口本来の価値か,正確には(「簡略化」しないならば),「価値の重心」と言い換えてもいい価値概念であった。さて,ここの価値の「移転」「形成」が問題となっている箇所での価値(傍点を付した箇所の価値)の場合はどうであろうか。正確さを求め「価値」を,[価値の重心]と言い換えた場合,「生産要素の[価値の重心]が新たな商品にそのまま移転され,新たな商品の[価値の重心]を構成することになる」「労働力はその消費

過程において……、新たな[価値の重心]を形成[生産]する」となるが、その論述は経済学的規定として成立するだろうか。山口は先程掲げた新田との論争論文で「価値形成といういい方は[価値の]重心形成といいかえることができ」る（[1990]76 頁）と言っているが、上記の文を含め、「いいかえ」可能とは思えない。「形成」という用語自体は様々な意味を持つので、「重心の形成」という「いいかえ」が出来るように見えるかも知れないが、価値の「形成」の構成部分である、価値の「移転」・「生産」を問題にする時、それを「重心の移転」「重心の生産」ということは決して出来ないだろう。私は、マルクスのなく価値>に戻り、労働が価値という形象 Bild になる、労働が価値に形象化 Bildung するという意味において、労働は価値を形成する bilden と考えたい。山口生産論のそれ以後の展開、剰余価値、「絶対的剰余価値の生産」「純粋な流通費用部分は……剰余価値からの控除」（157 頁）等々は、その「価値」を「価値の重心」と「いいかえ」てよいものではなく、事実上、マルクス・宇野のなく価値>概念になっている。ここで問題としているのは、価値「形成」労働等と言えるかどうかという言葉の問題なのではない。マルクスの場合には、<価値>の実体は労働であるという概念連関があり、その概念連関に立った時にのみ、価値の移転・生産・形成、剰余価値、資本の価値構成等の概念が成立可能になるのではなからうか。因みに、山口は、[1983b]（[1987b]に再録）の「(一)『資本論』冒頭の価値の規定」の詳細なテキスト・クリティークの後、104 頁において、価値の実体としての労働という規定に対し、「価値形態ないし価格にたいする実体という意味では、これ[価値]が実は実体といわれるべきものであり、（「価値の量を規定するものとしての労働」）は価値の実体というより、実体としての価値の量の規制者としてとらえられるべきものといつてよい。」と言っている。マルクス・宇野を検討した様々の論文で、山口は、価値の（社会的）実体としての労働等と言っているが、純粋の山口理論においては、価値の実体は労働であるという概念連関は成立しないのである。

なお、筆者が、[1975]「「転形問題」の一考察」（[1981]に再録）において、いわゆる転形問題を基本的に解決したと評価する伊藤誠は、価値量というカテゴリーを廃し、全体を価値の実体としての労働と価値の形態としての価格（生産価格）との関係として語っている。例えば、「生産手段(Pm)に投じられる資本価値の実体は、ここでの（「過去の労働」）48 時間にあたるが、生産過程で量的に変化せず移転されるにすぎないので(c)と規定される」（[1989]『資本主義経済の理論』62 頁）等々。

- ・12)山口は、ここで形成と言っているが、生産手段の(旧)価値の移転+労働による(新)価値の生産=新商品の価値の形成、という概念連関となるので、ここは「形成」ではなく正確には「生産」というべきだろう。

第 6 節 <価値形成>労働の要件論—生産価格構成要素—

従来「価値形成的労働の要件」（山口[1990]49 頁）という形で問題にされてきた問題は、山口的用語法でいうと、「価値の重心」を「規定」「規制」（50 頁）する労働であるかどうかの問題ということになる。そして、この「価値の重心」は生産価格として現象する交換力（価値）の重心

のことなので、生産価格を構成する費用かどうかなの問題となる。この問題に対し、山口は、最終的には[1996]年の『価値論……の諸問題』「はしがき」において、「費用—効果の関係が確定的」か「不確定」かという「区分」(iii頁)の問題だという。以下、本節では、この問題に関連した諸問題を検討しよう。

[1]山口は、『山口原論』「価値の重心」節の末の「労働価値説の理論的意義」で、「資本主義的生産にあつては、人間の生活と人間の労働・生産過程までが資本の行動原則である効率性原則によって極限まで締めあげられ、……、効率性連関としての基準編成（「価格変動の重心を規定する」「基準労働編成」）が作りあげられる」（128—129頁）といている。この規定は、宇野の「商品の価値がその生産に必要な社会的労働時間によって決定されるという、いわゆる価値法則は、実は商品の生産に必要な労働時間を絶えず短縮しようとする資本によって始めて実現される。」「資本による商品の生産、販売の競争によって—いわば締められた関係を抽象して（生産論で）価値の形成＝増殖の過程を明らかにした」（『旧原論』287頁）という規定から学んだものである¹³⁾。だが、山口は、上記の「生活」という用語にも現われているように、その視点を全面化し、「人間と自然との物質代謝の商品経済的な変造そのものを問題とし」ている（[1984d]37頁）。以下、その点を、『山口原論』のなかに見てみよう。(1)山口は、「第一節 労働過程」で、「あらゆる形態の社会に共通」な「人間と自然との……物質代謝」（81頁）過程そのものにおいては、「労働過程と消費過程と生活過程とは」（83頁）未分化であるという。次第二節「生産過程」で登場する「生産」概念をも入れ、筆者的にいうと、工場での生産（労働）と家庭での消費（生活）とが時間的・空間的に分離・分断されている、資本に雇用された賃労働者の場合とは大きく異なるのである（参照102頁の「分離、分断」）。(2)同じく労働といっても、資本主義的生産以前の労働（たとえば、領主への貢納のための生産労働、自営農家の商品生産労働等—青才追加）の場合には、「その中にたとえば共同体的団らんや儀式的時間、神への祈祷、礼拝の時間、昼寝の時間、大衆討議の時間などが含まれることを排除しない」（104頁）。(3)資本主義的な「労働・生産過程」における「効率性原則の強制」（104頁）。(4)さらに現代的な問題にも説き及ぶ。「人間生活そのものであるような人間の諸活動、たとえば料理、……、育児、子弟の教育、病人の介護といった人間的な活動までもが、……資本の価値増殖の対象となって、人間生活そのものの内部から離脱する」「人間生活の分解」（106頁）等々。上記(3)の点は、『資本論』以来問題とされ、また米英の労働社会学者等によってもテーマ的研究対象とされてきたものである。しかし、上記(1)(2)(4)の論点の提示、資本主義的な生活・生産の特殊歴史性を経済原理論の側から析出し、照射している点は大いに評価されるべきだろう。

・13)山口は、[1984d]「経済原則と経済法則」（[1987b]に再録）で、宇野は「節約的行動ないし効率編成があらゆる社会に共通な経済の原則である」としている（27頁）が、「資本の行動原理による強制を通して生産が手段として純化され、効率化が徹底化する」（31頁）という。

[2]山口は、『山口原論』「価値の重心」節の冒頭項「価値法則とは」で、「資本主義的商品の価値ないし価格の変動」は「ある重心があるかのような運動をする」、その「法則性」を「価値法則」という（107頁）という。そして、「人数に狭い限界のある熟練労働者の生産する商品などは追加供給が非弾力的であるため、それらの価格変動には重心が存在しな

い」(107頁。108頁も参照)という。熟練労働は、「価値の重心」を規定することのない労働であり、それ故に「価値形成」労働ではないことになるのである。事実、山口[1987a]では、「価値形成」労働の「要件」を「その質が単純労働化している」(174頁)ことだとしている。「追加供給が非弾力的」というのは、実際には、当該熟練労働者の労働時間の延長、当該熟練労働可能な労働者の育成等による増大等を考えると、追加供給がゼロということはありません、供給の(価格?)弾力性が「小」だ、追加供給には時間がかかるということだと思われる。とすれば、熟練労働等の問題も、供給の弾力性の有無ではなく、大小の問題、「価値の重心」・生産価格を規定するかしないかではなく、生産価格による市場調整がスムーズかどうかの問題と考えるべきだろう。質的区分の問題ではなく、量的相違・程度の相違の問題なのではないだろうか。

[1987a]論文で、山口は、単純労働ではない労働と、成果が不確定な売買労働とを、ともに、費用と効果の関係が不確定であり、「価値」を形成しない(生産価格を構成しない)という。熟練労働を「価値形成」的ではないと規定すると、「純粋な流通費用」が「剰余価値部分からの控除」(『山口原論』157頁)であるのと同様に、熟練労働者に支払われた賃金は、「剰余価値部分から控除」され、生産価格を規定・構成することなく、生産価格を構成する平均利潤から控除されることになるが、それでいいのだろうか。生産過程における労働である熟練労働も、単純労働ではない限り、「確定的」ではないといっているようだが、豊作・不作のある農業、同じ鉱区でも成果は日々異なりうる鉱山労働も含め、熟練労働も「価値形成」的と規定できるよう、もともとは山口理論がそうであったように、生産の確定性と流通の不確定性との区別、マルクスにおける、生産(zur Natur, 使用価値関連)と流通(nach einander, 商品の持手交替)との区別、ナイトの(豊作・不作等の)リスクと、(売れるか売れないかわからない等の)uncertainty(不確実性)との区別を重視すべきだろう。

[『山口原論』107頁で「熟練」を問題にする際、山口は、本項でのこれまで展開では強調部分を無視してきたが、「人数に狭い限界のある熟練労働者」(107頁)と言っていた。だがこの「人数に狭い限界のある」という修飾語自体が、山口の「熟練労働」は「価値形成」的ではないという規定を否定するものである。「狭い」と言っているが、広い・狭いは程度の問題である。生産と流通は区分できるが、熟練労働は、どの熟練度以下だと「価値形成」、以上だと「価値非形成」と区分できるものではないのではなかろうか。筆者は、[2006]81—82頁において、「山口氏の「確定性」の有無によって価値形成の有無を判別する見解」に言及しつつ、量的相違があるだけの世界では、「(価値形成の有無という)質的区分を与えることはけっしてできない」と述べたことがある。]

[3]第1節でも問題とした山口の流通過程捨象説の問題に帰ろう。[以下述べる点については青才[1990]第三章「流通過程の不確定性と生産価格論」を参照]。山口は[1973]「総過程論」章において、『山口原論』で述べる、流通費用¹⁴⁾・流通資本は、その不確定性の故に生産価格形成過程では捨象されるが故に、生産価格を規定するものではない、という説の原形を展開している¹⁵⁾。この説は、流通費用は、「価値の重心」規定的(=「価値形成」的)ではないというこ

とを含意するものだが、その点については、[1976b]論文（74－82 頁）で、確定・不確定という区分を明示し、流通費用は「価値形成」的ではないと明文化する。保管・運輸に関しては、その後の[1985]『山口原論』においても、「流通過程には、保管や運搬のように、投下資本量とその成果との間に一定の技術的決定関係のある、流通過程に延長され点状に在している生産過程とでもいべき過程が含まれて（いる）」（210 頁）と、マルクスの規定、それ故に、保管・運搬はあたかも「価値形成」であるかのような叙述を残している¹⁶⁾。だが、[1987 a]論文では、「ある商品の保管期間なるものには必ずしも技術的な確定的基準（は）なく」、「保管労働は価値形成的ではない」（179 頁）という。そして、次 180 頁では、「運搬……といった労働は、保管と共通の問題をもっている」とし、「価値形成労働とはいえない」という。ここで、流通資本は生産価格を規定しないが、保管費用は「価値形成」（生産価格構成）的と言っているかに見えた『山口原論』時代の矛盾は解消された。だが、筆者の見るところ、それは、一面では、次に述べる通り、マルクス・宇野説からの後退と考えられる。

- ・14) 諸流通費用は、主として、売買費用、保管費用、運輸費用とからなるが、以下、売買費用、＜価値＞を形成しない「純粋な」流通費用を、単に流通費用と呼ぶ。
- ・15) 流通過程捨象説は、現在、『小幡原論』『菅原原論』『さくら原論』江原[2018]第 1 章等、普及・拡がりを見せている。
- ・16) なお、山口は、[1978]172 頁で、宇野（[1967]266 頁）の「ぼくが、マルクスから教わって、保管、運輸の費用があらゆる社会に共通する限り価値を形成するというのは、商品としての使用価値の保管、運輸であることを前提して、それに一定の労働と資材とを要するから」である、という発言を、「確定性をもった労働かどうかという基準」の提示と解し、「従来の種々の難問も解決可能」と肯定的に評価している。

結論のみを述べることとする（青才[1990]参照）。(1)生産地から市場までの商品の運輸費用は、生産費用同様に、再運輸に必要な費用という規定性において、＜価値形成＞的（生産価格構成的）である。異なる生産地から同じ市場への運輸費用の差（額）は、マルクスが『資本論』で問題とした「位置の差額地代」を規定する。また、同じ生産地から異なる市場への運輸費用の相違は、サウジアラビアでの原油の支配的価格と日本でのそれとの相違[異なる土地での異なる生産価格間の相違といべきかも知れない]を規定する¹⁷⁾。(2)流通期間には「技術的な確定（性）」はないが、需給一致時点（生産価格成立時点）のそれとして、社会的必要在庫量という基準があり、それとの関連で、商品在庫期間（＝販売期間）・（商品 1 個当りの）流通資本には産業部門的基準があり、流通資本はその基準において生産価格を規定する。(3)保管費用は上記(2)の販売期間（＝商品保管期間）の産業部門的基準において、＜価値＞を形成し、生産価格を構成する。(4)総じて、目指すべきは、その不確定性の故を以て流通過程を捨象し、生産価格を生産資本・生産費用のみで語るのではなく、その流通過程の不確定性（時間的変動と個別資本的相違）を理論の内に取り込み生産価格論を豊穡化することなのではなかろうか。

- ・17) 『小幡原論』186 頁・330－331 頁では、「どこに運ぶかには、販売に特有な不確定な性格が現れる」と、運輸費用が、市場内部での行商の際のどこで売れるかわからない商品の運搬費用、それ自体販売費用の一部をなすそれであるかのように語られている。また、「遠方から運んできて運輸費が多くかかったからといっても、その分、高く売れない」という当然のことを運輸費用が価値形成的ではないことの証左としている。

豊度の相違が生産費用の相違を、位置の違いが運輸費用の相違をもたらす時、運輸費用の差額は「位置の差額地代」を規定するが、この問題を一体どう考えているのだろうか。『さくら原論』136頁にも、『小幡原論』を継承した同様の誤りがある。

終わりに

山口先生が東大に赴任された時の最初の大学院ゼミは、5・6人の学生・院生を集め、山口研究室で行われた。その年のテーマは、山口論文の検討であり、筆者に報告の順番がまわってきた際、先生から「今回はこれ」と商業資本論に関する抜き刷りを渡された。その時、筆者は、失礼にも、「商業資本なんかやったことがない」と言ってしまった。それに対し、先生が、苦笑しながら、「商業資本なんかですか」といわれたことを今でもはっきり憶えている。だが、皮肉なことに、筆者の初めての公表論文は、山口商業資本論に依拠し、そのさらなる発展を目指した論文[1979]「流通過程の変動と商業資本」であった。

筆者は、大学勤務後も、院卒後も、しばらくは、経済大学院の(年齢順に)山口・侘美・伊藤ジョイントゼミ等に顔を出していたが、その折のコンパまたはその後の喫茶店等での座談の場で、山口先生から、「青才君はマルクス大事だからまだわかる」と言われたことがある。筆者は、揶揄としてではなく「励み」と思って聴いた。筆者は、東京の学生のように高校時代に宇野を読んだことはなく、また、文学部出身なので、宇野・鈴木・日高等のテキストを用いた経済理論の導入講義(経済原論)を受講したこともない。筆者の経済学入門は、わかってはわからなくてもいいからマルクス『資本論』全3巻を読み通すことであった。本稿第5・6節の、マルクスのなく価値概念への固執は、そして、マルクスの先にある宇野理論のさらに先を行く山口理論に対する筆者の旧守的スタンスは、そのような経路依存性の故だろう。

文献リスト

○再録されている単行本がある場合には、引用頁等はその再録本の頁とする。

青才高志[1979]「流通過程の変動と商業資本」(東大院)『経済学研究』第19号。

青才高志[1984]「論争の小箱 商品・貨幣論における物象化と物神性」『経済評論』1984年3月。

青才高志[1990]『利潤論の展開—概念と機構—』時潮社。

青才高志[1991]「プラン問題をめぐる諸見解—佐藤金三郎氏を悼んで—」『信州大学経済学論集』1991年3月。

青才高志[1992]「株式資本論について」山口重克編『市場システムの理論』御茶の水書房。

青才高志[2006]「マルクスのサービス概念」『信州大学経済学論集』2006年9月。

伊藤誠 [1975]「「転形問題」の一考察」(東大)『経済学論集』1975年10月。(〔1981〕に再録)

伊藤誠[1981]『価値と資本の理論』岩波書店。

伊藤誠[1989]『資本主義経済の理論』岩波書店。

岩田佳久[2022]「商品集積体と債権化から信用貨幣を導出する新しい価値形態論—or の関係で結びついた商品集積体を基礎として」『季刊 経済理論』2022年4月。

宇野弘蔵・向坂逸郎編[1948]『資本論研究——商品及交換過程——』河出書房。

宇野弘蔵[1950・1952]『経済原論』。『宇野弘蔵著作集第一巻』岩波書店。(『旧原論』と略記)

宇野弘蔵編[1967]『資本論研究』Ⅲ (筑摩書房)。

宇野弘蔵[1973]『資本論五十年』下 (法政大学出版局)。

江原慶[2018 a]「価値形態論における計算貨幣」『季刊 経済理論』2018年1月。

江原慶[2018 b]『資本主義的市場と恐慌の理論』日本経済評論社。

江原慶[2021]「資本による貨幣の変容」『季刊 経済理論』2021年10月。

大内秀明・桜井毅・山口重克編[1976]『資本論研究入門』東京大学出版会。

小幡道昭[2006]「貨幣の価値継承性と多態性: 流通手段と支払手段」, (東大)『経済学論集』72-1。(小幡[2013]に再録)

小幡道昭[2009]『経済原論』東京大学出版会。[『小幡原論』と略記]

小幡道昭[2013]『価値論批判』弘文堂。

さくら原論研究会編[2019]『これからの経済原論』, ぱる出版。[『さくら原論』と略記]

桜井毅[1958]「価値の生産価格への転化について—ボルトキエヴィッツといわゆる「転化問題」」『武蔵大学論集』5-2。(桜井[1968]に再録)

桜井毅[1968]『生産価格の理論』東京大学出版会。

菅原陽心[2012]『経済原論』御茶の水書房。[『菅原原論』と略記]

鈴木鴻一郎編[1959]『貨幣論研究』青木書店。

鈴木鴻一郎編[1960]『利潤論研究』東京大学出版会。

鈴木鴻一郎編[1961]『信用論研究』法政大学出版局。

鈴木鴻一郎編[1960・1962]『経済学原理論』東京大学出版会。[『鈴木原理論』と略記]

新田滋[1989]「消費及び情報の価値論 (一)」『コンセプト・ノワール』創刊号。

廣松渉[1989]『弁証法の論理—弁証法における体系構成法—』青土社。

藤川昌弘[1976]「第Ⅷ章信用」大内・桜井・山口編『資本論研究入門』東京大学出版会。

山口重克[1961]「商業信用と銀行信用—信用貨幣流通の意義と限界—」鈴木編『信用論研究』。(山口[1984a]に再録)

山口重克[1963]「鑄貨論の問題と貨幣論の方法」(電気通信大学『学報・人文社会篇』第15号。(山口[1984a]に再録)

山口重克[1964]「商業資本と商業利潤」『電気通信大学学報』(1)1964年8月・(2)1964年12月。(山口[1983 a]に再録)

山口重克[1968]「信用恐慌論の方法」鈴木鴻一郎編『マルクス経済学の研究』上巻, 東京大学出版会。(山口[1983 c]に再録)

山口重克[1971]「金融の原理的機構」, 小野・志村・玉野井・春田・山口共著『現代金融の理論』(第I篇第一章)時潮社。(山口[1984a]に再録)

山口重克[1972]「労働生産過程と価値の実体規定」清水正徳他共著『宇野弘蔵をどうとらえるか』芳賀書店。(山口[1987b]に再録)

山口重克 [1973]「第四章 総過程論」時永他『(NHK 大学講座) 経済学』日本放送出版協会。

山口重克[1976 a]「貨幣・資本」(大内・桜井・山口編『資本論研究入門』東京大学出版会)。

[山口[1983 c]に再録]

山口重克[1976 b]「商業資本論と競争論」(2)(東大)『経済学論集』1979年10月。(山口[1983 a]に再録)

山口重克[1978]「流通と価値」大内・桜井・山口編『マルクス経済学の現状と展望』東洋経済新報社。(山口[1987b]第Ⅱ部第3章(一～四)に再録)

山口重克[1979]「原理論の課題と方法」『経済学批判』第6号。(山口[1983c]に再録),

山口重克[1983 a]『競争と商業資本』岩波書店。

山口重克[1983 b]「冒頭商品の価値の規定について」東京大学『経済学論集』52-3。[山口[1987]に再録]

山口重克[1983 c]『資本論の読み方』有斐閣。

山口重克[1984a]『金融機構の理論』東京大学出版会。

山口重克[1984b]「経済的諸関係と行動主体」『経済評論』33-10(山口[1987b]に再録)

山口重克[1984 c]「いわゆる「方法の模写」について」(山口・平林編『マルクス経済学・方法と理論』時潮社)。(山口[1987]に再録)

山口重克[1984 d]「経済原則と経済法則」『現代の解説』第二号。(山口[1987 b] 第Ⅱ部第3章(五)に再録)

山口重克[1985]『経済原論講義』東京大学出版会。[『山口原論』と略記]

山口重克[1987 a]「労働価値論の射程」『現代の解説』第三号(山口[1987 b]第2章に再録)

山口重克[1987 b]『価値論の射程』東京大学出版会。

山口重克[1990]「流通費用といわゆる価値形成について—新田滋氏の批評に答える—」『コンセプト・ノワール』2号。(山口 [1996]に再録)

山口重克[1991]「価値概念の広義化再論—降旗氏の反論に答える—」『状況と主体』187号, 谷沢書房。(山口[1996]に再録)

山口重克[1992]「段階論の理論的必然性—原理論におけるいくつかのブラック・ボックス—」山口重克編『市場システムの理論』(山口還暦記念論文集) 御茶の水書房。

山口重克[1995]「廣松渉の価値・貨幣論を読む」『思想』852号。(山口[1996]に再録)

山口重克[1996]『価値論・方法論の諸問題』御茶の水書房。

渡辺昭[1962]「価値尺度としての貨幣」(和歌山大学)『経済理論』69号。

渡辺裕一[1984]「資本結合と証券業資本——「資本市場」の原理的規定——」(伊藤誠・桜井毅・山口重克編『利子論の新展開』社会評論社)。